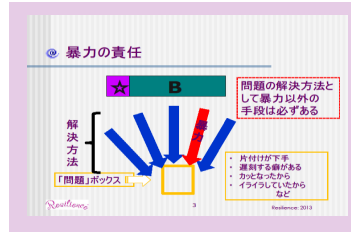


全学研修会・法学部FD「安心して働ける・学べる安全な環境作り ～デートDV防止研修会～」開催報告

講師：NPO法人レジリエンス代表 中島 幸子 氏

日時：平成25年11月20日(水)13:00～14:30 会場：南1号館3階 第31講義室

参加人数：95名(男性：57名、女性：38名／教職員：15名、学生：73名、一般：7名)



11月20日、昨年度に引き続き、NPO法人レジリエンス代表の中島幸子氏を招いて、全学研修会（法学部についてはFD）を開催し、デートDVはなぜ起きるのか、どういう関係に陥るのか、問題を抱えた学生等へのサポートについてお話いただきました。

研修会は「デートDV」・「DV」の不健全な関係性であること、健全なパートナーシップは二つの要素、1：対等であること、2：尊重しあうことが必要であることを学びました。デートDV・DVに限ったことではなく、暴力は、いじめの問題、子どもや高齢者に対する虐待、パワハラ、アカハラ等、同様に不健全な関係性の中で起きる。人が人を傷つけるという関係性の中ではパワー（力、力関係）とコントロール（支配）という概念が歪んだ形で存在している。Bさん（加害者：Batterer）が上で、☆さん（被害者：自ら輝いていく存在）が下に置かれるという上下関係が存在する。意見の差が大切に尊重されない場では、不健全な関係性が必ず潜んでいること等が示されました。暴力は誰かを支配しようとしたときに発生すること、そこには、自分にとって都合が生じた時に誰かに暴力を振るって良いという特権意識の発想があり、特定の人たちを見下すという行為は、「差別」であると話されていました。

また、暴力の種類について、目に見えない形の暴力が多く存在していることに気づかされました。今回は、特に性暴力について取り上げられました。性暴力は様々なところで発生している割にはなかなか聞こえてこないし、問題視されていない。と言うのも☆さん(被害を受けた人)たちの多くはそれを訴えられない現状がある。多くの場合、誰かに相談した時に「一緒に飲みに行ったのでしょ」、「つきあっているんでしょ」と被害にあった人が責められるような仕組みが今の社会にはあった。なぜ性暴力だけが、まず☆さんに責任を問うところからスタートしているのかについて、もっと考えられる人

たちが増えなければ、この社会的構造は変わっていかない指摘されました。そして、知らない人からの性暴力より、知っている人からの性暴力が圧倒的に多い現状を踏まえ、性暴力を測る概念として性的自己決定権「自分の体は自分のもの」という権利に言及しました。これは、人間として誰でも持っている権利であり、誰が自分の体を見るのか、だれが自分の体に触れるのかは、自分が決めるもの、生きている間、持ち続けたいといけない、大切にされないといけない権利であると強調されました。

デートDVは、身近に起こり得る問題で、☆さんが相談する相手、友人が☆さんの心理的な影響を理解することが重要です。中島氏は心に深く傷跡が入った場合、☆さんがBさんから離れて時間が経過したからと言って消えていくものではない。デートDV・DVは、暴力があるからコミュニケーションが不可能になる。出来事の記憶が蓄積する脳の「海馬」は、強烈なストレスを感じたときに機能しなくなる。危険であっても、別れと復縁を繰り返すことなど、平和で安全な世界にいる人からは理解されにくい☆さんの心理について詳しく説明されました。

中島氏は「自分を幸せにする力は一人一人の中にある。誰かを探し続けていたら自分の力を見落とししてしまう。自分のことを一番良く知っているのは自分だということを忘れないで」とエールをおくれました。さらに「カウンセラーや学校の先生などが言うことに対して違和感を感じたら、その違和感を大切に、理解してくれる人じゃないと思って次の人にあたること」とアドバイスされました。

生きるということは、ものすごく大変で、必死にならないといけない時もある。その時に1人だけで抱え込むのではなく、周りに理解者が増えればその人は楽になる。「尊重を増やしていく」という意識が一人でも多くの人に芽生えることを願いました。